



戸隠神社中社の三本杉の位置

戸隠中社に凜然と立つ「三本杉」は、樹齢八百年にも及ぶ巨樹であり、大鳥居を中心に一辺約七十二メートルのトライアングル状に配されている。大鳥居の東西に立つ「は」と「ろ」の杉の幹には、丁寧な補修された大きな洞の痕がある。これを眺めていると、悠久の時のなかで、この地を見守り続けてきた御神木と、この地で生活を営んできた宿坊や門前町の人々との、世代を重ねた

深い信頼を窺うことができる。大鳥居を潜り抜け、中社本殿に向かって石段を上ると、北側の「い」の杉が迎えてくれる。この杉を含め、「い」「ろ」「は」三本の杉を合わせて「三本杉」というのだが、面白いことに、北にある「い」の杉は、三本の矢が束ねられたように大きく三俣に分かれ、真つ直ぐ上に伸びている。こうした特徴的な樹形により、多くの人は、この「い」の杉のみを「三本杉」だと早合点してしまうという。

信濃ではこの地を開拓した三つの氏族が知られている。諏訪大社御祭神の武御名方神（大國主神の御子）を祖神とする諏訪族。穂高神社御祭神の穂高見命（海神、綿津見命の御子）を祖神とする安曇族。そして、阿智神社や戸隠神社中社御祭神の天八意思兼命を祖神とする阿知（智）族の三氏族である。天八意思兼命とは天照大神の天石窟隠れに際して、思考をめぐらせ神々を指揮し、日神の再来を果たした思慮深く知恵のある神として知られている。『先代旧事本紀』によれば、「八意思兼神児・表春命 信乃阿智祝部等祖」とあり、八意思兼命の御子の表春命が信濃の阿知氏の祖であることが解る。志賀剛氏は阿知（智）の語源について、葦や茅など水源や水辺との関連を指摘する。「人間は考える葦である」とたとえたのはパスカルであったが、日本の神話においても、人を青人草（蒼生）と表現する。そういった「古



「三本杉」い、の杉



御祭神御神影

『事記』や『日本書紀』冒頭でも、葦の原野から稲田へと発展していく様が描かれている。戸隠の涼気を深く吸い込みながら、阿知氏が知恵ある開発の民として奔走していた太古の信濃に思いを馳せる。

『日本書紀』や『続日本紀』によれば、応神天皇のとき、後漢の靈帝の後胤とされる阿知使主が百済から帰化する。阿知使主は渡来系漢人の漢氏の祖氏であり、当代きつての知識人として、多くの技術や文典を伝え、日本の発展に貢献した。ただし、阿知の地名は阿知使主の渡来より古いため、渡来系氏族と阿知氏との関連性を歴史的に実証するには史料に乏しいのだが、渡来人の阿知使主と信濃三族の阿知氏が同じ阿知を名

乗り、共に知恵でつながっているというのも面白い。

中社宝物館（青龍殿）に「御祭神御神影」という軸がある。その軸の下方にはとぐろを巻いた九頭龍大神が鎮座する。その上方には奥社御祭神の天手力雄命を頂点として、その左（向かって右）下に中社御祭神の天八意思兼命、さらに、その隣のやや下には宝光社御祭神の天表春命が描かれ、戸隠の地を守護している。なんとも興味深いのは、軸のなかで三角形に配された三柱の神々が、中社大鳥居を囲んだ三本杉の配置と妙に符合することである。「三本杉」「信濃三族」「御祭神御神影」この地を結ぶ縁は皆トライアングルなのである。

シリーズ 御祭神考 エピソード ③

徳橋 達典

平成二十四（二〇一二）年、戸隠奥社の杜と杉並木を守る会は、森林総合研究所と協働で、戸隠神社奥社参道の杜と杉並木を保護するため、これら樹木のDNA検査を行った。これにより、戸隠神社中社の大鳥居を囲む樹齢八百年の三本杉（「は」の杉）と、奥社参道に居並ぶ樹齢四百年の杉並木の一部が血縁関係にあることが分かった。つまり、奥社の杉並木は中社の三本杉から挿し木によって植栽された親子だという可能性が示されたのだ。

日本の神話では、親子や血のつながりという関係性を重視する。天照大神とともに、皇祖とされる高御産靈神の御子は、中社御祭神の天八意思兼命である。この妹の櫛幡千千姫命は天照大神の御子天忍穗耳尊の妻となり、瓊瓊杵尊を生み出す。こうして、瓊瓊杵尊は皇孫あるいは天孫と称され、この神が高天原から地上の

葦原中国へと降臨する様を天孫降臨と呼ばれるようになった。ちなみに、八意思兼命は天孫の母方の伯父神にあたる。

八意思兼命の御子、天表春命は戸隠神社宝光社御祭神であり、父神の天八意思兼命とともに戸隠の地に恵みを与えている。さらに、『先代旧事本紀』には、八意思兼命の御子天下春命が「武蔵秩父国造等祖」であることが記されている。これにより、埼玉県秩父地方の総鎮守である秩父神社には、天下春命の末裔とされる秩父国造の知知夫彦命とともに、その祖神とされる八意思兼命が御祭神として祀られている。清澄な戸隠の気は上昇し、関東山地を越える風となり、秩父地方にも吹き流れている。



武甲山。秩父盆地を潤す神聖な山である。



秩父神社御本殿

写真提供：秩父神社

とくはし たつり氏プロフィール

1964年、東京都生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程修了。博士（神道学・國學院大學）。共同通信社ビジュアル報道局写真部次長を経て、現在、今尾神社禰宜・國學院大學兼任講師。著書『吉川神道思想の研究 吉川惟足の神代巻解釈をめぐって』（ペリカン社）、『日本書紀の祈り 多様性と寛容』（ペリカン社）、『日本書紀の系譜 いのちとつながり』（ペリカン社）など